

論文審査の要旨及び担当者

論文題名

心理検査体験の治療的機能に関する研究—ロールシャッハ・テストに着目して—

論文審査の要旨

本論文は、心理臨床の現場において心理療法に先立って施行される心理検査が、そのフィードバックとともに重要な治療的機能を持ちうることを、試行事例や臨床実践事例を質的に分析することによって明らかにした研究である。それは、心理検査を用いたアセスメントを治療的介入とみなすアプローチ (Finn, S.E. 1996, 2007) による試みとして我が国における先駆的研究として位置づけられる。

本論文は全6章から構成される。

第1章では、心理検査体験の治療的機能に関する国内外の研究動向が展望され、心理検査を用いたアセスメントを治療的介入とみなすアプローチ; PATI (Psychological Assessment as a Therapeutic Intervention, Postpon, J. M., Manson, W. E. 2010 など) が紹介された。このアプローチは、心理検査とそのフィードバックを検査者と被検査者の協働作業にとらえ、その治療的機能に着目している。それは、被検査者が自らの手で新たな発見の糸口をつかみ、自己理解を深め、今後の人生への示唆を得る可能性を有していると論じられている。我が国においても、このようなアプローチのさらなる展開が望まれるが、まだ十分に研究がなされているとは言えない現状が報告され、このアプローチによる研究の必要性が論じられた。

第2章では、心理検査のうちロールシャッハ・テストに着目して、そのフィードバックに関する先行研究が紹介された。我が国における代表的なロールシャッハ・システムとして、片口法と包括システムの2つが挙げられるが、包括システムについては、Rorschach Feedback Session (中村・中村, 1999) というフィードバック手続きが提唱されているのに対して、片口法のスコアリングシステムでは、フィードバックの方法やルールは現在のところ明確に体系化されておらず、新たにそれらを考案する必要性について述べられた。

第3章では、最新の世界基準で作成されたロールシャッハの解釈システムである“Rorschach Performance Assessment System (以下, R-PAS)” について解説し、当該システムがロールシャッハ・テストの多様なスコアを合成した変数について標準得点化を行い、プロフィールとして可視化することに着目し、そのプロフィールをフィードバックにおいて活用する可能性について論じられた。

第4章では、R-PASによる協働的なフィードバック手続きが考案された。R-PASの実施、スコアリング、解釈、そしてフィードバックという一連のプロセスが実際にどのように行われるのかについて詳細が示され、非臨床群の協力者である成人5名に対し、R-PASのプロフィールを活用したフィードバック・セッションが試行され、その検査の体験についてインタビュー調査が行われた。さらに臨床実践事例に対しても、R-PASとそのフィードバック・セッションが施行され、その経過について、被検査者にとって心理検査及びそのフィードバック体験がどのように体験されたかという視点より考察が深められた。そこで、R-PASの強みとして、標準得点化されたプロフィールが検査者と被検査者の間で共有される客観的根拠となり、フィードバックの説得力が強められることが論じられた。このように検査者と被検査者が可視化された心理検査の結果を共有して行われるフィードバックは、被検査者の新たな気付きや自己理解を促し、それ自体が治療的介入となる可能性があると考えられた。もちろん、複雑な心理検査経過が標準からの逸脱を示すプロフィールとして可視化されることで、被検査者の不安が喚起されることもあり、逆に逸脱していないことについて失望を生じさせることも指摘された。すなわち標準得点化されたプロフィールそのものが治療的に機能するわけではなく、むしろ、そのプロフィールをめぐっての検査者-被検査者間の協働が重要であることが強調された。R-PASにおいては、力動的視点が重視されており、日本に普及している片口法と同様に、内容分析や系列分析に着目する個性記述的解釈が行われる。客観性を重視した標準得点化プロフィールを基礎として、個々の被検査者にとって妥当性を持つ所見を作成するために、この個性記述的解釈が重要な役割を果たす。そこで個々の被検査者にとって妥当性のある個性記述的解釈を行うためには、心理検査施行において1つ1つのロールシャッハ反応の背景にある被検査者のイメージを検査者が共感的に理解する過程が重要となる。すなわち、治療的介入となりうるフィードバックを実現するためには、心理検査施行段階において検査者がどのように被検査者の反応を受けとめていくか、そこでどのような役割を果たしうるかが重要であり、治療的介入としてのアセスメントとは、心理検査における検査者と被検査者の深い共感体験と、これをふまえたフィードバック体験の両者により成立すると結論づけられた。

第5章では、本研究の起点となった臨床実践事例が報告されている。そこで氏は、ロールシャッハ・テストの検査者としてクライアントに出会っている。被検査者がロールシャッハ・テストの図版から触発されたイメージを語り、検査者はそのイメージを一つ一つ丁寧に聞き取っていく。その体験をもとに検査者は心理検査結果の所見をまとめ、フィードバック・セッションを担当したところ、被検査者は検査担当者のカウンセリングを希望し、長期にわたるカウンセリングへと展開した事例であった。本章では、この事例においてロールシャッハ・テストとそのフィードバックの体験がどのように治療的機能を有するに至ったのかについて詳細に考察を行っている。考察では、心的外傷を抱える者への心理的援助に関する臨床心理学的知見を参照しつつ、ロールシャッハ・テストの図版刺激は被検査者の傷つき体験を再活性化して、心理的な痛みをもたらすこと、しかし、その際に検査者が、その傷つきや痛みの体験について共感的に理解する、つまりその心理的体験が検査者と被検査者の間で共有されることによって、心理検査体験が心理療法的なプロセスの出発点としても機能しうるということが論じられた。

最終章の第6章は、本論文の結論がまとめられている。被検査者の視点に立てば、ロールシャッハ・テストを受検し、その結果をフィードバックされることは、被検査者が自覚していない、もしくは表には出せないまま心の奥深くにしまい込んできたものが、表に現れる体験となり得る。検査者は、被検査者がそのような体験をする可能性について十分認識したうえで、検査場面において被検査者に向き合う必要性が論じられた。被検査者にとって検査場面は、表にたちあらわれた心の表現が、検査者にどのように受けとめられ抱えられたのかという体験であり、その体験の意味は大きい。被検査者にとっては、反応を受けとめた検査者の様子、質問段階における口調、フィードバックにおいて選ばれる言葉などのすべてが、その心理検査体験を形成し、長く記憶されていく。心理検査体験は、被検査者の人生の物語が良くも悪くも変わっていく分岐点になりうるのである。心理専門職は、被検査者の人生に深く関与することの責任の重さを胸に刻み、心理検査実践における自らの姿勢を吟味し続けねばならないという言葉をもって本論文は締めくくられた。

依田尚也氏の学位請求論文は、ロールシャッハ・テストの検査やそのフィードバック体験が、どのように治療的に機能しうるのかという研究課題について、複数の実証研究を行うとともに、自身の臨床実践の事例研究を行っている。

臨床心理学研究は、心理的援助に関する知見を集積する際に、援助者自身がその研究の対象となる対人的相互的な心理過程の関与者であるという特徴を持つ。そのため、物質を対象とする科学と同様の客観的なアプローチが大変難しくなるが、その反面、その過程への関与者の主観的体験を自ら客観的に扱うことによって、主観的体験を扱う臨床心理学としての客観性を確立する可能性を秘めている。その意味で、氏の研究は、援助者としての自身の体験より研究課題を発見し、文献研究によりその課題を明確にした上で、新たな方法論を考案し、その効果について被検査者の主観的体験の質的研究によって客観的に考察しようとしている点において、きわめて臨床心理学的であるといえるだろう。また、心理検査フィードバックの困難さについても、自分自身の主観的所感に終わらせることなく、多くの心理専門職初心者が実践において感じている困難さについて質問紙調査を行っている点も、主観的体験を客観化しようとする努力として見なすことができる。また、丹念に国内外の文献研究を行う中で、我が国における治療的介入としての心理アセスメント・アプローチの研究の必要性を論じ、実際に最新のロールシャッハ解釈システム R-PAS を用いたフィードバック・セッションの手続きを考案し、試行し、被検査者の体験についてインタビューを行う質的な実証研究を行っている点も、臨床心理学的研究としての客観性の探求として評価できる。

臨床心理学は、こうした科学としての側面と、技（アート）的側面をもつ。周知のとおり、一般に科学とは、客観主義に基づき、現象を数値化して、普遍的な法則を定立しようとするものである。一方、技（アート）とは、援助者とその対象者の間の生きた人間関係において、両者の主観が相互に響きあいながら生じる新たな展開について、個性記述的に明らかにするアプローチを指す。この二つの観点から、本論文の内容を改めて眺めてみると、R-PASによるプロフィール提示は、ロールシャッハ・テストのなかではもっとも科学的客観主義を重視する方

法であり、これに対して Finn, S.E.の提唱した治療的／協働的アセスメントをめざすフィードバックは、もともと技（アート）的な側面を扱っていることに気づかされる。本論文は、この2つの、ある意味で両極にあるものが相互にどのように作用しあい、それが治療的にどのように機能するかを実証しようとする試みであり、心理検査における科学と技（アート）の両極を架橋する試みとしても興味深いアプローチであった。審査員の一人は、最新のロールシャッハ・システムである R-PAS を取り上げて、そのフィードバックの治療的な意味を問題とした研究は、我が国だけでなく世界的にみても大変新しい試みであるとして、その新規性、独創性について高評価を与えた。

しかし、審査会ではロールシャッハ反応に文化的要因が影響することから、日本人のデータを標準化資料として用いていない R-PAS が日本においてすぐに普及することは難しいという見通しから、むしろ日本で広く普及している片口法のフィードバック手続きを考案することが実際的であるという意見もあった。しかし、この意見は、R-PAS を用いてフィードバック・セッションを考案した本研究の価値を下げるものでなく、むしろ今後の研究課題に触れたものと考えらるべきであろう。また、5章の事例研究では、実際に片口法によるフィードバックが行われており、その経験から、フィードバックの前提として心理検査場面において被検査者の心理的体験がしっかりと検査者との間で共有されることの重要性が論じられている。それは、ロールシャッハ・テストにおける個性記述を重視する片口法の本質にも深くかかわる結論であった。

以上の審査により、本論文は、臨床心理学の研究論文として、研究者自身の臨床実践経験に深く根ざした問題意識を、緻密な文献研究によって研究課題として練り上げ、実証的に検討を行った労作であり、独創性ととも臨床的有効性を兼ね備えている点で、論文審査担当者3名は全員一致して、依田尚也氏の学位請求論文が博士（心理学）の学位にふさわしい業績であると判断した。

論文審査主査 吉川 眞 理 教授
伊藤 研 一 教授
高瀬 由 嗣 特別非常勤講師
(明治大学文学部教授)